

# 令和5年度 卒業生等アンケート結果の分析

人文学部・人文社会科学研究科

教育学部・教育学研究科

医学部医学科

医学部保健学科・保健学研究科

理工学部・理工学研究科

農学生命科学部・農学生命科学研究科

地域社会研究科

教養教育開発実践センター

## 【人文社会科学部（人文学部（旧カリキュラム）を含む）】

標本数が少なく回収率が低かったため、旧カリキュラムの人文学部卒業生（3名）と人文社会科学部卒業生（27名）を一緒に分析した。今回の回答の分析結果は以下の通りである。

### [進路について]

問 3 就職・進学先は、入学時に希望していた進路と一致しますか。

「希望どおり」「大体希望どおり」が 66.7%であり、約 7 割の学生が希望どおりに進路選択が出来ていることが分かる。

### [教育や学生支援について]

問 4 教育内容に、全体として満足でしたか。

「満足」「どちらかといえば満足」が 90.0%であり、前回 R4 調査より 10 ポイント高くなっている。「不満」「どちらかといえば不満」は 0.0%であり、高い満足度が得られている。

問 5 学習や研究に関わる施設、設備、備品は十分でしたか

「十分」「不足していたが学習や研究はできた」が 70.0%であり、R4 調査より 10 ポイント高くなっている。ただし、「不十分で学習や研究がやりにくかった」というやや否定的な回答は 10.0%であり、R4 調査と同程度で、不満の程度の改善はみられなかった。今後の改善が望まれる。

問 6 課外活動に関わる施設、設備、備品は十分でしたか

「十分」「不足していたが課外活動はできた」が 60.0%であり、R4（60.0%）調査と同じであった。ただし、「不十分で課外活動がやりにくかった」というやや否定的な回答は 6.7%であり、R4(20.0%)調査から改善していることが分かる。

問 7 就職活動への支援は十分でしたか

「十分」「不足していたが就職活動に問題はなかった」が 63.0%であり、R4（63.0%）、R2(61.0%)の結果とほぼ同じであった。ただし、「不十分で就職活動に苦労した」は 6.7%であり、R4（10.0%）より減少している。前回からの改善は見られたものの、就職活動状況に対応できていない者が一定数存在する可能性があり、さらなる改善が望まれると考えられる。

### [学生生活で感じたこと、身に付いたと思うことについて]

問 8 学位授与方針の中で掲げられている知識や資質がどれだけ身についたか

- ① 教養と専門性：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 73.3%、「どちらかといえば身に付かなかった」が 10.0%であった。
- ② 見通す力：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 90.0%、「どちらかといえば身に付かなかった」が 3.3%であった。
- ③ 解決していく力：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 73.3%、「どちらかといえば身に付かなかった」が 3.3%、「身に付かなかった」が 3.3%であった。
- ④ 学び続ける力：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 86.7%、「どちらかといえば身に付かなかった」が 3.3%であった。

学びについて総じて肯定的な回答が多かったものの改善の余地は残されていると考えられ

る。「解決していく力」については否定的な声に応えられるような改善が望まれる。

問 9 教養教育科目で到達目標としている知識・学力は身についたか

- ① 主体的学習：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 66.7%、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」が 10.0%であった。
- ② 多角的な視点：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 80.0%、「どちらかといえば身に付かなかった」が 10.0%であった。
- ③ 英語能力：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 36.7%、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」が 33.3%であった。
- ④ 地域志向性：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 73.3%、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」が 13.3%であった。
- ⑤ 国際性：「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」と回答した者が 40%、「どちらかといえば身に付かなかった」「身に付かなかった」が 23.3%であった。

主体的学習、多角的な視点、地域志向性については肯定的な回答が多かったことに対し、英語能力と国際性については、否定的な回答が比較的に多く、改善対策が必要であることが明らかになった。

問 10 大学で学んだことや経験が仕事で役に立っているか

「非常に役に立っている」「役に立っている」と回答した者が、①専門性で 50.0%、②見通す力で 53.3%、③解決していく力で 56.7%、④学び続ける力で 66.7%であった。「あまり役に立っていない」「役に立っていない」と否定的な回答は①で 10.0%、②で 10.0%、③で 23.3%、④で 13.3%で多くはなかった。満足している回答が半数は越えているものの、高い満足水準だとは言えない。今後更なる改善が求められていると思われる。

問 11 大学で学んだことや経験が仕事以外で役に立っているか？

「非常に役に立っている」「役に立っている」と回答した者が、①で 56.7%、②で 80.0%、③で 56.7%、④で 73.3%であった。「あまり役に立っていない」「役に立っていない」と否定的な回答は①で 16.7%、②で 20.0%、③で 20.0%、④で 6.7%で多くはないが一定数いることが分かる。すべての項目で満足している回答が半数は越えているものの、①専門性や③解決している力の満足水準は十分に高いと言えない。その項目については、今後も向上を図っていくことが望ましい。

[在学生のため、今後の教育や学生支援に必要と思われること]

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか（複数回答可）

教育の充実が望まれている項目として半数以上が挙げられているのには、コミュニケーション能力(76.7%)、自己管理能力(53.3%)、社会的責任等の態度・志向性(53.3%)、情報収集力(53.3%)、論理的思考力(50.0%)があった。今後の学部教育改善の参考にしたい。

問 13 問 12 以外のどの分野の支援を今後充実させればいいのか（複数回答可）

半数以上が挙げられている項目は、研究室・ゼミナール活動(56.7%)があった。本学部の大きな強みである少人数・双方向教育のゼミナール活動の更なる充実が求められていることが分かった。支援の充実が望まれており、引き続き改善を図りたい。

問 14 再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいか

「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」と「技術的知識ではない広い教養を職業人としての実力をつけるために学ぶ」が 40.0%で多かった。今後の学部教育改善の参考にしたい。

### 【人文社会科学研究科】

・アンケート対象者である令和元年度修了生（13人）に対し、回答数は5人であった（回答率 38.5%）。

#### 問 3

就職・進学先について「5：希望どおり」が2名、「4：大体希望どおり」が1名、「3：希望どおりではないが満足している」が2名であり、おおむね満足している結果となった。

#### 問 4

教育内容全体について「5：満足だった」が3名、「4：どちらかといえば満足だった」が2名であり、比較的満足度が高い回答であった。

#### 問 5

学習や研究に関わる施設、設備、備品について「5：十分だった」が4名、「4：不足していたが学習や研究はできた」が1名であった。おおむね満足度が高い結果となったが、研究分野によっては必要となる設備が異なるため、学生によっては不足している部分があることが推測される。

#### 問 6

課外活動に関わる施設、設備、備品について「5：十分だった」が4名、「4：不足していたが課外活動はできた」が1名であった。おおむね満足度が高い結果であったが、一部不足を感じる方がいる事実については、施設設備等の整備費用と効果を慎重に見極め行っていくことが課題と考える。

#### 問 7

就職活動への支援について「5：十分だった」が3名、「4：一概に言えない」と「2：不十分で就職活動に苦勞した」が各1名であった結果については、キャリアセンター主催のガイダンスの時間を増やすなどの対応が考えられる。

#### 問 8

「①学際的な教養と高度な専門性」「②学術的観点から自然や社会を見通す力」については全員が「5：身に付いた」「4：どちらかといえば身に付いた」と回答しており、総じて身に付いたものと思われる。一方、「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」「④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」については「5：身に付いた」「4：どちらかといえば身に付いた」「3：一概に言えない」「2：どちらかと言えば身に付かなかった」に意見が分かれており、知識以外の技能や応用力の修得が今後の課題となると推測される。

#### 問 9

教養教育科目の設問のため研究科では直接関連しない設問と思われるが、「①主体的・能動的学修態度」「②多面的な視点や思考法」「④地域志向性」については全員が「5：身に付いた」「4：どちらかといえば身に付いた」と回答しており、総じて身に付いたものと思われる。一方、「③国際共通語としての英語能力」「⑤国際性」は「5：身に付いた」「4：どちらかといえば身に付いた」「3：一概に言えない」にそれぞれ意見が分かれており、英語能力や国際性の修得が今後の課題かと思われる。

#### 問 10

「④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」については、全員が「5：非常に役に立っている」「4：役に立っている」と回答しており、おおむね大学院での学修の成果が出ているものと推測される。

なお、「①学際的な教養と高度な専門性」「②学術的観点から自然や社会を見通す力」「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」については、おおむね役に立っているとの回答結果であったが、一部「1：役に立っていない」という回答があり、大学での経験が仕事上役に立っている実感が得られていないことが示唆された。

しかしながら、就職先となる企業や分野によっては、大学院で学修した学術的な知識、能力を活かしづらいこともあると思われるので、検証の余地があるといえる。

#### 問 11

「②学術的観点から自然や社会を見通す力」「④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」については、「5：非常に役に立っている」「4：役に立っている」と回答しており、おおむね大学院での学修の成果が出ているものと推測される。

- ① 学際的な教養と高度な専門性」については「5：非常に役に立っている」「4：役に立っている」「3：一概に言えない」に、「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」については「5：非常に役に立っている」「4：役に立っている」「3：一概に言えない」「1：役に立っていない」にそれぞれ意見が分かれており、否定的な回答が比較的目的立った。大学院での経験がすぐさま日常に活かされるわけではないことが示唆された。

#### 問 12

「3. 情報収集力」「4. 論理的思考力」「5. コミュニケーション力」「7. 周囲（他者）へ配慮する力」「9. 社会的責任等の態度・志向性」「10. 課題探求能力」「11. 問題解決力」の各項目で 3 名以上回答があり、仕事上役立つ知識・スキルに関する教育の充実が望まれていることが示唆された。

#### 問 13

「2. 部活・サークル活動（文化・研究中心）」「4. 研究室・ゼミナールの活動」「8. 地域貢献活動」「10. アルバイト」の各項目で 3 名以上の回答があり、学生生活の充実に関する支援が望まれていることが示唆された。しかしながら、アルバイトについては、経済的に苦しい学生が増加傾向であることは把握しているが、経済的支援のあり方も含めて検討する必要がある。

問 14

「1. 資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」「3. 必ずしも仕事・職業とは関係のないことを広く教養として学ぶ機会」「5. 学ぶ機会ということでは特に希望することはない」に各 1 名の回答があり、現在実施している市民カレッジをはじめとした大学院生以外の方が授業を受ける機会の確保が必要と推測される。

## 【教育学部】

卒業生数に対する回答率の低さに鑑みれば、結果をそのまま評価することについて慎重でなければならない。あくまでも積極的に調査に協力して下さった卒業生の意見として、以下の各設問の結果について述べる。

### 問4

教育内容について「満足だった」「どちらかといえば満足だった」が約8割を占め、「どちらかといえば不満足だった」が5%、「不満足だった」が0%であったことから、概ね満足していたと考えられる。

### 問5

学習や研究に関わる施設、設備、備品について「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」の合計は79%であり、前回調査（令和4年度）の70%を上回っている。「不十分で学習や研究がやりにくかった」「不十分で学習や研究ができなかった」との回答はなかったが、施設、設備、備品については随時現状確認を行い、また学生教職員連絡協議会等の場で意見交換を図りながらさらなる改善に努める。

### 問7

就職活動への支援について「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」の合計は68%で、前回調査（令和4年度）と同水準である。「十分だった」は60%を超えており、教職への就職支援を充実させた取り組みについての一定の評価が得られていることを確認できる。一方で「不十分で就職活動に苦労した」「不十分で就職活動ができなかった」の合計が10%となっており、その具体的な内容について今後精査したうえで、改善に努める。

### 問8

①学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の各項目のうち①、②、④については「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」の合計はいずれも70%を超えており、対して「身に付かなかった」「どちらかといえば身に付かなかった」の合計は10～15%である。③についてはこれらに比して「身に付かなかった」「どちらかといえば身に付かなかった」の合計が26%となっており、教員養成のなかでの国際社会・地域社会への視点の涵養と課題解決に向けた実践力の向上を図る必要がある。

### 問10

①学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の各項目について、「非常に役立っている」「役に立っている」の合計を見ると、それぞれ①63%、②68%、③53%、④74%となっている。

いずれの項目とも全学の平均値を上回っているが、③については問8の結果と同様に他の項目と比べ低い数値となっており、教育課程の改善を図りながらその向上に向けた取り組みを行う必要がある。

#### 問 11

①学際的な教養と高度な専門性、②学術的観点から自然や社会を見通す力、③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力、④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の各項目について、「非常に役立っている」「役に立っている」の合計を見ると、④は約 80%、②は約 60%であり、①と③は 40%台である。

①については全学的な傾向と比べても低くなっており、教育学部のカリキュラムの職業とのレリバンスの高さとは対照的に日常生活に対する有用性についての考慮の必要性を提起するものである。③についても、国際社会・地域社会への幅広い視座を確立することの必要性が示唆される。

一方で④の数値は全学的な傾向と比べても 10%程度高く、生涯学習につながる学びの視点を提供し得ていると評価できる。

#### 問 12

複数回答のなかで、最も多く選択されたのは「4. 論理的思考力」「5. コミュニケーション力」「6. 自己管理能力」であった（同数）。これらはいずれも教員として、また広く社会人として求められる資質であり、学部先輩方からの重要な示唆として、今後の教育活動に活かしていきたい。

#### 問 13

複数回答のなかで、上位 3 つの選択肢は順に「4. 研究室・ゼミナールの活動」「5. キャリア教育」「1. 部活・サークル活動（スポーツ中心）」「9. 海外留学」（1. と 9. は同数）であった。回答は「3. クラス担任制度」を除いて広く分布しており、多様なニーズがあることを認識したうえで今後の学生支援の充実を図る。

#### 問 14

「1. 資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」の占める割合が 60%を超えており、次いで「必ずしも仕事・職業とは関係ないことを広く教養として学ぶ機会」が 26%となっている。前者については今後既卒者に対するキャリア向上のための研修の充実といった取り組みの必要性を示していると捉えられる。後者については、大学が単なる職業訓練にとどまらない教養知というものを提供することの意義を示唆していると考えられる。

#### 問 15

教育学部のカリキュラム等に具体的に言及した記述は見られないが、全般的な意見も含め、今後の教育活動の参考としたい。

### 【教育学研究科】

#### 問 3

「希望どおり」「大体希望どおり」が約 80%であり、「希望どおりではないが満足している」が 1 名であるので、概ね入学時に希望していた進路に進めていることが伺える。



問4

「満足だった」「どちらかといえば満足だった」が100%であり、教育や支援については十分であったと考えられる。

問5

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」が100%であり学習や研究に関わる施設、設備、備品は十分であったと考えられる。

問6

「十分だった」「不足していたが課外活動はできた」が約80%であり、概ね設備、備品については肯定的に捉えてよいと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問7

「十分だった」「不足していたが就職活動には問題なかった」が約60%であり、就職支援についてはやや課題があると言える。なお、2名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問8①

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8②

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問8③

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が約80%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問8④

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問9①

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問9②

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 9 ③

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が 40%であり、「一概に言えない」が 3 名であったため十分達成させることができていないと考えられるが、教育学研究科の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、英語教育は重視されていない実情にあることは否めない。

問 9 ④

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」が 80%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1 名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 9 ⑤

「どちらかといえば身に付いた」が 60%であり、「一概に言えない」が 2 名であったため十分達成させることができていないと考えられるが、教育学研究科の特性上、国内の教育課題の解決が重点化されるため、国際性については重視されていない実情にあることは否めない。

問 10①

「非常に役にたっている」「役に立っている」が 100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 10②

「非常に役にたっている」「役に立っている」が 100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 10③

「非常に役にたっている」「役に立っている」が 100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 10④

「非常に役にたっている」「役に立っている」が 100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 11①

「非常に役にたっている」「役に立っている」が 80%であり、概ね達成させることができたと考えられる。なお、1 名が「一概に言えない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 11②

「非常に役にたっている」「役に立っている」が 100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 11③

「非常に役にたっている」「役に立っている」が約 80%であり、概ね達成させることがで

きたと考えられる。なお、1 名が「あまり役に立っていない」と回答しているが、専攻が明らかではないので、その原因については明らかにできない。

問 11④

「非常に役にたっている」「役に立っている」が 100%であり、十分達成させることができたと考えられる。

問 12, 13, 14

現在、教育学研究科は教職実践専攻に一本化されているので、教職実践専攻の修了生が 1 名しかいない本調査結果では、今後の指導への参考にすることは難しい。

### 【医学部医学科】

今回、調査対象となった令和元年度卒業生について、以下のとおり分析した。

教育内容に関して「満足・どちらかといえば満足」と回答した割合は62.5% (5/8)であり、「どちらかといえば不満足・不満足」という回答は無かったため、教育内容に大きな不満はないと思われる。

また、学生生活で身についたことにおいても、「身に付いた・どちらかといえば身に付いた」と回答する方が過半数を占めた。

※①学際的な教養と高度な専門性 (75%...6/8)、②学術的観点から自然や社会を見通す力 (62.5%...5/8)、③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力 (62.5%...5/8)、④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力 (75%...6/8)

特に①学術的な教養と高度な専門性については、「仕事に関わることで、大学で学んだことや、経験が役に立っている」と感じた割合が87.5% (7/8) を占めている。

このことから、教育内容については卒業後も概ね有用であると感じている方が多いと思われる。

一方で、学習や研究に関わる施設・設備・備品の「十分だった・不足していたが学習や研究はできた」と回答した割合は50%(4/8)であり、例年同様に低い傾向にある。これまで同様に、引き続き施設・設備・備品を充実させる取組みを検討・実施していくことが求められているものと思われる。

また、在学生のために今後の教育や学生支援に必要と思われることとして、「コミュニケーション力」(87.5%...7/8)や「専門的知識・技能」(75%...6/8)が多く挙げられていた。医師として働くうえで、将来的に必要となる事項が求められていると考える。また、それ以外の分野としては、海外留学についての支援を充実させることが望ましいという回答が多かった (62.5%...5/8)。ポストコロナ時代も踏まえ、それぞれの事項について充実した教育・支援体制を構築することを検討・実施することが必要である。

## 【医学部保健学科・保健学研究科】

医学部保健学科 26 名、保健学研究科 2 名、計 28 名の分析を行いました。

### ・問 2、問 3 現在の職業と進路の一致

96%が「医療・福祉」職に就いており、86%が入学時に希望していた進路と一致していた。

### ・問 4 教育内容に関する満足度

「不満足だった」7.1%、「一概に言えない」14.3%であり、他の約 80%はほぼ満足していた。

### ・問 5 学習や教育に関わる施設・設備・備品の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は 85.7%であり、総計の 78.3%よりも高い満足度であった。

### ・問 6 課外活動の満足度

「十分だった」「不足していたが学習や研究はできた」と回答した学生は 64.3%であり、総計の 61.0%よりもやや高い満足度であった。

### ・問 7 就職活動への支援に関する満足度

「十分だった」「不足していたが就職活動に問題はなかった」学生は 78.6%であり、総計の 65.7%よりも高い満足度であった。

### ・問 8 学生生活で感じたこと、身についたと思うことについて

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせると、①「学際的な教養と高度な専門性」は 85.7%と高く、総計を上回っていた。しかし、②「学際的観点から自然や社会を見通す力」57.1%、③「学際的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」53.6%と低く、いずれも総計よりも下回っており、約 40%は「一概に言えない」と回答していた。保健学科・保健学研究科が実施している医療・保健・福祉に関する専門性の高い教育は高い評価が得られたといえる。しかし、自然や社会を見通す力や国際社会や地域社会の問題を解決していく力は、約 4 割が一概に言えないと回答していたことから、認識が深まるような具体的な教育が必要と考えられる。

### ・問 9 教養科目について

「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」を合わせて、④「地域志向性」78.6%は比較的高かったが、①「主体的・能動的学習態度」60.7%、②「多元的な視点や思考法」71.4%であり、総計よりも低かった。特に、③「国際共通語としての英語能力」28.6%、④「国際性」25.0%と低く、国際性に伴い英語教育の充実が必要である。

### ・問 10 仕事に関わることで、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「学際的な教養と高度な専門性」82.1%、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」67.9%、③「学際的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」53.6%、④「常に新しい

問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」75.0%であり、いずれも総計の比率に比べ高い割合であった。特に、①「学際的な教養と高度な専門性」は高く、専門的知識が仕事に役立っていた。

・問 11 仕事以外の日常生活の中で、弘前大学で学んだことや大学での経験の役立ち状況

「非常に役立っている」「役立っている」をみると、①「学際的な教養と高度な専門性」53.6%、②「学術的観点から自然や社会を見通す力」50.0%、③「学際的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」46.6%、④「常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」60.7%であり、いずれも総計の比率同様の割合であった。

役立っている割合が、問 10 では高いが問 11 ではあまり高くなかったことから、仕事である医療・保健・福祉に関する学びは身についた、役立っていると感じているが、日常生活ではあまり役立っていると感じていないと考えられる。問 8、問 10、問 11 の結果より、日常生活の中でも学びが役立つことを認識できるような教育が必要と考えられる。

・問 12 在学生のため支援が必要と思われること

半数以上が必要と回答したものは、「コミュニケーション力」であり、問 9 の回答などからも英語力を含めたコミュニケーション力の支援を必要としていると考えられる。

・問 13 支援を充実させることが望ましい項目

半数以上が必要と回答したものは、「研究室・ゼミナールの活動」、「キャリア教育」であり、総計同様の傾向であり、学修環境や就職に関連した支援を希望していた。

・問 14 今後本学で学ぶ時の機会

人数が多かったのは、「資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会」であった。

・問 15 大学の教育や学生支援サービス向上のための意見

意見として、以下の内容があげられた。

- ・ 学生寮が学校とちょっと近いと雪の中、通学しやすい。
- ・ 講義内容、実習における指導内容にばらつきがあったように思う。
- ・ 在学中に教員によるパワハラを受けたり、講義に使用する教室内で教員同士の口論をみることがあった。教員の経験値の差もあると思うが、学ぶ上での環境整備をしていただきたい。

以上のように、教員指導への要望を含む学修環境の充実を求める内容であった。

## 【理工学部・理工学研究科】

### 問1 回答件数

学部卒が45件（R4年度20件）、院卒が18件（R4年度16件）であった。学部卒については昨年度より回答件数は倍増以上となっているが、いずれにせよ回収率の向上が望まれる。

### 問2 回答者の職業？

学部卒；製造業と情報通信業が大半を占めている。

院卒；製造業が最も多い。

### 問3 入学時の希望通りの進路に進んでいるかどうか？

（総回答数（学部卒45、院卒18）のうち、下記選択肢への回答数の割合を示す。左側の数値が学部卒、右側が院卒。以下、特に断りのない限り同様。）

「希望どおり」20%, 33%

「大体希望どおり」20%, 28%

「希望通りではないが満足している」40%, 39%

「希望通りではなく満足していない」9%, 0%

「希望する進路がなかった」11%, 0%

満足との回答が大半を占めている。

### 問4 教育内容は全体的に満足であったか？

「満足だった」20%, 44%

「どちらかといえば満足だった」44%, 44%

「一概に言えない」27%, 12%

「どちらかといえば不満足だった」4.5%, 0%

「不満足だった」4.5%, 0%

学部卒では肯定的回答が6割、大学院卒では8割を超えた。

### 問5 学習や研究に関わる施設などは十分であったか？

「十分だった」49%, 56%

「不足していたが学習や研究はできた」27%, 28%

「一概に言えない」13%, 11%

「不十分で学習や研究がやりにくかった」9%, 5%

「不十分で学習や研究ができなかった」2%, 0%

学部卒、院卒ともに「十分だった」とする回答数が5割程度を超えている。

### 問6 課外活動に関わる施設などは十分であったか？

「十分だった」36%, 50%

「不足していたが課外活動はできた」22%, 17%

「一概に言えない」 29%, 28%  
「不十分で課外活動がやりにくかった」 13%, 5%  
「不十分で課外活動ができなかった」 0%, 0%

「十分だった」とする回答が学部卒・院卒とも一番多かった一方で、「一概には言えない」や「不十分」とする回答の割合も3~4割程度存在する。

#### 問7 就職支援に関する支援は十分であったか？

「十分だった」 47%, 44%  
「不足していたが就職活動に問題はなかった」 20%, 22%  
「一概に言えない」 27%, 28%  
「不十分で就職活動に苦労した」 4%, 6%  
「就職活動ができなかった」 2%, 0%

学部卒・院卒ともに肯定的回答が7割近くとなっている。

#### 問8 学位授与方針の中で掲げられている知識や資質がどれだけ身についたか？

(総回答数(学部卒 180,院卒 72)のうち、項目①~④に対する下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「身についた」 17%, 44%  
「どちらかといえば身についた」 44%, 36%  
「一概に言えない」 23%, 17%  
「どちらかといえば身につかなかった」 11%, 3%  
「身につかなかった」 5%, 0%

学部卒では6割程度、院卒では8割程度が肯定的な回答となっている。

#### 問9 教養教育科目で到達目標としている知識・学力は身についたか？

(総回答数(学部卒 225,院卒 90)のうち、項目①~⑤に対する下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)

「身についた」 12%, 20%  
「どちらかといえば身についた」 36%, 29%  
「一概に言えない」 26%, 31%  
「どちらかといえば身につかなかった」 19%, 11%  
「身につかなかった」 7%, 9%

学部卒、院卒ともに肯定的な回答が5割程度となっている。

#### 問10 大学で学んだことや経験が仕事で役に立っているか？

(総回答数(学部卒 180,院卒 72)のうち、項目①~④に対する下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒、右側が院卒。)



「非常に役に立っている」 14%, 44%  
「役に立っている」 37%, 26%  
「一概に言えない」 23%, 22%  
「あまり役に立っていない」 16%, 2%  
「役に立っていない」 10%, 6%

学部卒は 5 割程度，院卒は 7 割程度が肯定的回答となっている。

#### 問 11 大学で学んだことや経験が仕事以外で役に立っているか？

(総回答数 (学部卒 180,院卒 72) のうち, 項目①～④に対する下記選択肢への平均回答数割合を算出。左側の数値が学部卒, 右側が院卒。)

「非常に役に立っている」 9%, 32%  
「役に立っている」 39%, 32%  
「一概に言えない」 34%, 24%  
「あまり役に立っていない」 9%, 6%  
「役に立っていない」 9%, 6%

院卒の回答の方が学部卒の回答よりも肯定的な傾向にある。

#### 問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいか (複数選択可) ?

(総回答数 (学部 207,院 93) のうち選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋)

学部卒 ;

1 位「コミュカ」 13%, 2 位「問題解決力」 12%, 3 位「論理的思考力」 11%

院卒 ;

1 位 (同率)「専門的知識・技能」, 「コミュカ」, 「問題解決力」 13%

学部卒・院卒ともに「コミュニケーション能力」や「問題解決能力」を望む声が高い。

#### 問 13 問 12 以外のどの分野の支援を今後充実させればいいのか (複数選択可) ?

(総回答数 (学部 125,院 43) のうち選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋)

学部卒 ;

1 位「研究室・ゼミ活動」 22%, 2 位「インターンシップ」 17%, 「キャリア教育」 13%

院卒 ;

1 位「研究室・ゼミ活動」 29%, 「部活等 (スポーツ)」 13%, 「部活・サークル活動」, 「インターンシップ」 11%

学部卒・院卒ともに研究室・ゼミ活動の充実を望む声が多。

#### 問 14 再び本学で学ぶとしたら, どのような機会にしたいか？

(総回答数(学部卒 45,院卒 18)のうち選択された割合が多い選択肢上位 3 つを抜粋)

学部 ;

- 1 位「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」 42%,
- 2 位「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」 24%
- 3 位「技術的知識ではない広い教養を職業人としての実力をつけるために学ぶ」 18%

研究科 ;

- 1 位「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」 39%,
- 2 位「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」 28%,
- 3 位「技術的知識ではない広い教養を職業人としての実力をつけるために学ぶ」 22%

学部卒・院卒ともに「資格修得のための特定の技術的・専門的知識」、「必ずしも仕事とは関係のないことを教養として学ぶ」とする回答が多い。

## 【農学生命科学部・農学生命科学研究科】

### I 基本事項について

問3 就職・進学先は、入学時に希望していた進路と一致しますか。

52%が“大体希望通り”、38%が“希望どおりではないが満足している”と回答しているため、将来の進路について学部在席時に概ねキャリア形成における活動ができていたものと考えられる。

### II 本学在学中の教育や学生支援について

問4 教育内容に、全体として満足でしたか。

回答項目について“満足だった”、ならびに“どちらかといえば満足だった”をあわせて、76%の回答が得られている。そのため、概ね教育内容においてCPを伝えながら理解を得ていると考えられる。ただし、5%の回答者において“どちらかといえば不満だった”という回答もみられた。現在の教育内容は概ね適切であると思われるものの社会に求められる教育内容のありかたに目を向ける必要もあるかもしれない。

問5 学習や研究に関わる施設、設備、備品は十分でしたか。

90%の回答が“十分だった”、ならびに“不足していたが学習や研究はできた”と回答していた。学部予算や学部後援会による支援を得ながら学科の実習における設備の改善を行ってきたことから上記のような回答が得られたものと考えられる。ただし、最新の研究動向に追いつくためにはこれら支援策に加え外部資金など各教員における不断の努力も必要と思われる。

問7 就職活動への支援は十分でしたか。

52%の回答者が十分であったと回答している。これは学部内に設置している学生就職支援委員会の活動によるところが多いが、各学科の就職への指導や研究室での支援によるものと考えられ概ね就職支援は適切に行われているといえよう。今後も、学部学生、大学院生の資質をみながら適切なキャリア形成の支援を行う。

### III 学生生活で感じたこと、身についたと思うことについて

問8 弘前大学では、次の①から④に掲げる知識や資質を身に付けた学生に対して、学位を授与する旨の方針を明確にしました。それらは身に付いたと思われませんか。

#### ①学際的な教養と高度な専門性

“身に付いた”、および“どちらかといえば身に付いた”とする回答が81%であった。これは各研究室での卒業研究や修士研究の課題が適切であったことによると考えられる。

#### ②学術的観点から自然や社会を見通す力

“身に付いた”、および“どちらかといえば身に付いた”とする回答が71%であった。これは普段の授業出席による取組に加えて、各研究室での卒業研究や修士研究の課題が適切であったことによると考えられる。

一方“一概に言えない”という回答が29%であった。これは研究課題が内包する研究背景やその考察における思考過程に対して十分な時間がなかったことからとも考えられる。教員が業績報告に対して費やす時間や外部資金獲得に向けて費やす時間が多いため、学生に対して十分な説明や議論を行うことができなかつたかもしれない。学生に対する教育姿勢に

ついて考察を深める必要があるかもしれない。

③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力  
“身に付いた”、および“どちらかといえば身に付いた”とする回答が 53%であったものの、“一概に言えない”、“どちらかといえば身に付かなかった”という回答が 47%あった。基礎研究に特化していく傾向がいなめず、社会に対するインパクトを引き起こす研究についての、大学研究のありかたについて教員内での議論や、学生に対して説明する責任があるかといえよう。

④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力  
“身に付いた”、および“どちらかといえば身に付いた”とする回答が 67%であった。“一概に言えない”という回答が 33%あった。今後も課題達成のみでなく、課題解決の力を学生自身の成長につなげるスタンスで指導することが必要であるが概ね適切に教育ができているといえよう。

問 10 特に仕事に関わることで、大学で学んだことや、経験が役に立っていると感じますか。

①学際的な教養と高度な専門性

“非常に役立っている”が 24%、“役立っている”が 29%を全回答の 53%を占めていることは大学で学んだことが各個人の仕事に役立っていることから望ましい結果である。それ以外の回答があることは、学部や大学院で学んだ経験を活かせる職業に就けていない等に起因すると考えられ、48%を占めたことに対応しているものと思われる。

②学術的観点から自然や社会を見通す力

“非常に役立っている”が 24%、“役立っている”が 29%を全回答の 53%を占めていることは上記と同様な傾向である。

③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力

“一概に言えない”が 43%を占めている。この課題を学生への指導に落としこんでいくことが教員に求められることであろう。

④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力

“非常に役立っている”、“役立っている”が 72%の回答となっている。このことは、社会の問題を解決することに直結すると捉えられなくても自分自身の問題解決能力を高める原動力になっていると考えられる。卒業研究や修士研究における取組かたに自分自身の今後の成長に関わる様な能力を身につけられるような教育をこれまでと同様に引き続き行っていくことが望まれる。

問 11 仕事以外の日常生活の中で、大学で学んだことや、経験が役に立っていると感じますか。

①学際的な教養と高度な専門性

“非常に役立っている”、“役立っている”が 52%を占めている。一方、“一概に言えない”が 33%を占めている。みずから身につけた内容を社会にでたときに役に立つような応用方法

について学生と向き合って議論していくことも必要であろうが現在の教育内容が概ね適切であると考えられる。

#### ②学術的観点から自然や社会を見通す力

“非常に役立っている”、“役立っている”が 52%を占めている。一方、“一概にいけない”が 33%を占めている。このことは、卒業研究や修士研究における取組が仕事以外の日常生活の中において自然や社会を見通す力に結びついたことを意味しており、他方、学んだ内容と異なる分野に就職したケースも多かったことによるものであろう。

#### ③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力

“非常に役立っている”、“役立っている”が 52%を占めていることは、卒業研究や修士研究における取組が仕事以外の日常生活の中において自然や社会を見通す力に結びついたことを意味している。就職先が学んだ内容と異なる分野に就職したケースが多かったことによるものであろう。

#### ④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力

“非常に役立っている”、“役立っている”が 81%を占めていることは、仕事を含めた日常生活の中において自らを成長させていく学び続ける自己研鑽力が身についたことである。このことは、本学の DP で謳われている方針に適合しており、個人の成長に役立てることができた証といえる。このような力が自分で望むキャリア形成を行うことができれば、仕事においてもその能力を発揮してもらえることになる。そのためにもキャリア形成においても学生に対するより一層の支援も必要であろうが概ね現在の対応も適切であると考えられる。

#### IV 在学生のため、今後の教育や学生支援に必要と思われること

問 12 今後どのような力を育成する教育の充実が望ましいですか。(○はいくつでも可。)

(選択肢) 1. 専門的知識・技能 2. 基礎的知識・技能 3. 情報収集力 4. 論理的思考力  
5. コミュニケーション力 6. 自己管理力 7. 周囲(他者)へ配慮する力 8. 倫理観  
9. 社会的責任等の態度・志向性 10. 課題探求能力 11. 問題解決力 12. その他

5. コミュニケーション力においては最も回答が多く、16%であった。その他の充実も同じ程度の回答を得ていることから、まんべんなく、個人の資質を伸ばすような教育も必要であろうが現在の支援が概ね適切であると考えられる。

問 13 問 12 以外のどの分野の支援を充実させることが望ましいですか。(○はいくつでも可。)

(選択肢) 1. 部活・サークル活動(スポーツ中心) 2. 部活・サークル活動(文化・研究中心)  
3. クラス担任制度 4. 研究室・ゼミナールの活動 5. キャリア教育  
6. インターンシップ 7. ボランティア活動 8. 地域貢献活動 9. 海外留学  
10. アルバイト 11. その他

4. 研究室・ゼミナールの活動 5. キャリア教育 6. インターンシップについての回答が他項目に比較して高い回答を得る傾向にあった。学部においては研究室単位で行われる卒業

研究や修士研究においてより一層の充実を図る必要がある。キャリア教育やインターンシップについては大学全体の取組が求められるが現在の支援が概ね適切であると考えられる。

問 14 今後なんらかの形で再び本学で学ぶとしたら、どのような機会にしたいですか。

- (選択肢) 1. 資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会  
2. 技術的知識ではない広い知識を、職業人としての実力を磨くために学ぶ機会  
3. 必ずしも仕事・職業とは関係のないことを広く教養として学ぶ機会  
4. その他のことで学ぶ機会  
5. 学ぶ機会ということでは特に希望することはない  
6. その他

1. 資格など修得のための特定の技術的・専門的知識を学ぶ機会についての回答が 52%と最も高かった。このような取組についてどのように学部が対処できるか検討する必要もあろうが現在の支援が概ね適切であると考えられる。

問 15 上記以外で、大学における教育や学生支援サービス向上のために、ご意見がありましたらお聞かせください。

“講義のカリキュラムが体系的に知識を身につけられるものになっておらず”という回答がみられた。教員の交代もある中で、より充実したカリキュラム構成への対応も必要であろうが現在行っている毎年ごとのカリキュラムのあり方の検討を続けていくことが望ましい。

## 【地域社会研究科】

本研究科の回答数が1名であるため一概には言えないが、以下のとおり分析した。

在学中における教育内容（問4）については「どちらかといえば満足だった」、学習や研究に関わる施設、設備、備品（問5）については「十分だった」という回答であったことから、本研究科の教育課程や研究環境は、概ね評価されていると考える。

一方、就職先・進学先（問3）については「希望どおりではないが満足している」であるが、就職活動への支援（問7）については「一概には言えない」であったことから、今後、キャリアセンターの活用を促す等、効果的な支援策を検討していくこととする。

また、本学が定めるディプロマ・ポリシー（問8）については、「②学術的観点から自然や社会を見通す力」及び「③学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力」について、「どちらかといえば身に付いた」という回答であった。これらは、本研究科におけるディプロマ・ポリシー（課題探求能力に優れ、広い視野と総合的な判断力と実践能力を行使できる等）と関連していることから、十分な教育研究指導を行うことができたと考える。

しかしながら、仕事や日常生活において、大学で学んだことや経験が役立っていると感じるかの設問（問10及び問11）については、「あまり役に立っていない」という回答が多くみられたが、これらは学んだことと現在の仕事との関連もあることから一概に評価できないと考えている。一方、「④常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力」は「役に立っている」という回答は、本研究科での学びの成果として注目したい。

## 【教養教育開発実践センター】

### 問9

全卒業生に対して約13%の回答率であることを鑑みると、ここでの傾向を安易に一般化すべきではない。また令和5年度調査より設問項目を変更したことで、令和4年度の結果との比較を行うこともできない。そのうえで回答結果を見ると、①主体的・能動的学習態度、②多角的な視点や思考法、③国際共通語としての英語能力、④地域志向性、⑤国際性の各項目について、「身に付いた」「どちらかといえば身に付いた」の合計は①②については70%台、④については60%台後半であった。これらについては概ね目的が達成されていると評価できる。一方で③および⑤は30%程度と低く、3分の1程度が「一概に言えない」と回答しており、さらなる改善が必要である。なお教養教育の英語科目については令和4年度に大規模なカリキュラム改訂を行っており、今後その成果との比較検討を行う予定である。